

## 『琵琶記』テキストの明代における變遷——弋陽腔系テキストを中心に——

土屋 育子

Transition of the Texts of *Pipa ji* Published in Ming Dynasty : Particularly on *Yiyang-qiang* Texts

Ikuko TSUCHIYA

## 要旨

元末明初の人高明が書いたとされる『琵琶記』は、明代を代表する戯曲作品の一つである。明代中期に至り、ちょうど演劇の流行と出版業の勃興とが重なったこともあり、『琵琶記』は各種のテキストが出版され、いまもその多くが現存しているが、それらの繼承関係については、未だ不明な点が多い。

本稿で取り上げる弋陽腔と呼ばれる地方劇は、明代中期以降、特に中國南方において流行し、その後、さらに各地での發展・變容を経て新たな地方劇を生み出した。そのため、後世へ影響の大きさという点から、その存在意義は看過できないものがある。また、演劇の脚本が出版されるという演劇のテキスト化はすでに明代以前から始まっていたとはいえ、量的に見れば明代中期以降は、それまでとは比べものにならない数の出版が行われていた。それはつまり、實上演上の變化だけではなく、出版物としての變化も伴っていたと推測出来るであろう。それでは、中國傳統演劇が、そのターニングポイントの一つも言える明代にどのような變遷をたどったのか。そのことを、現存するテキストを手がかりにしつ

つ、演劇の發展とともに、當時急激に擴大した出版業の動きの一端を明らかにしてみたい。

## はじめに

明代には、様々な通俗文學が多様な發展を遂げたが、それは演劇のジャンルでも例外ではなかった。その中で、本稿で取り上げる『琵琶記』は、この時期における最も代表的な戯曲作品の一つである。『琵琶記』が流行した要因の一つとしては、明の太祖朱元璋が愛好したことがよく知られている<sup>1)</sup>。

もちろん、権力者のお墨付きをもらったことだけが、『琵琶記』が流行した原因ではないであろう。そのストーリーに、人びとを引きつける何かがあったからに違いない。『琵琶記』は元末の高明（？～一三五九）によって書かれたとされるが、物語の原型は、宋代ごろにすでに出来上がっていたといわれている。元の陶宗儀『南村輟耕錄』『院本名目（院本（金代に行われた笑劇）のリスト）』には、「蔡伯喈」という外題が

挙げられている。また、明・徐渭『南詞叙録』『宋元舊篇』には、「趙貞女蔡二郎」という外題が見え、さらに「蔡伯喈が妻を捨てたために、雷に打たれて死ぬ」という内容であったことが記されている<sup>30</sup>。蔡伯喈とは、後漢のころの學者で蔡邕のことであるが、ここに「蔡二郎」とあるように、本來は蔡邕とは關係がなかったものが、物語が伝えられるうちに蔡邕の話になったのではないかといわれている<sup>31</sup>。

あらすじは次の通りである。

主人公は、蔡伯喈と趙五娘という、結婚してまだ二ヶ月の若夫婦である。夫蔡伯喈は兩親に科擧の受験を勧められ、妻と兩親を故郷に残して上京、首尾良く合格する。ところが、伯喈は、彼を見込んだ牛丞相から、娘を娶るよう強要される。伯喈は初めは断っていたが、天子の勅命がくだり、結婚を承知してしまう。

一方、故郷に残された妻五娘には、苦難がふりかかる。夫はなかなか戻ってこない上に、折から饑饉が発生し、五娘は舅姑を養うため、自分は糠を食って堪え忍ぶ。舅姑は五娘が自分一人だけ美味しいものを食べていると勘違いするが、事實を知ると、嫁を疑ったことを後悔するあまり亡くなってしまう。五娘は自分の髪を賣って葬式を済ませ、その後夫を捜しに都へ向かう。

蔡伯喈は、中秋の夜、名月を愛でて故郷を想う。妻の牛氏は夫の様子を不審に思い、問いただすと、蔡伯喈はすべてを打ち明ける。牛氏は父丞相を説得し、蔡伯喈の家族を捜すための使者を送る。

上京した五娘は、牛氏の計らいで夫蔡伯喈と再會を果たす。皇帝の使者が到着し、蔡伯喈には中郎將が授けられ、五娘は陳留郡夫人、牛氏は河南郡夫人にそれぞれ封ぜられた。

さて、明代は特に、嘉靖年間（一五二二〜六六）以降の出版事業の勃興によって、小説や戯曲などの娯樂書を含む様々な出版物が生み出された。演劇のテキストでは、完本（丸本）はもちろん、當時流行した劇種の散齣集<sup>さんしゅくしゅう</sup>なども多く出版されている。「當時流行した劇種」というのは、主に「弋陽腔<sup>ぎやうかう</sup>」という劇種を指す。中國大陸における傳統演劇は、各地域にその地方の音樂・方言などで行われる地方戲が存在しており、弋陽腔はそのうちの一つである。「散齣集」の「散齣」とは、一幕からなる芝居のことを指す。「齣」とは、「幕」とほぼ同じ意味の言葉である。

現代の中國では、「折子戲」と呼ばれるものがそれに當たる。歌舞伎や淨瑠璃などでいえば、「見取狂言」に相當する上演形式における、それぞれの演目のことである。明代には、演劇は多く長編化し、すべてを上演するのに、數日を要したという記録も残されているほどである<sup>32</sup>。その一方で、この散齣集の存在が示すように、簡便にハイライトの一段を上演することも行われていたようである。散齣を集めた散齣集はかなり需要があったと思われる、現在確認されているだけでも十數種類にのぼる。『琵琶記』は、當時非常に流行した作品だけあって、現存する完本の數も非常に多い上、散齣集に収録される數も他のものと比べて飛び抜けて多い。

明代を代表する戯曲である『琵琶記』の版本に關する先行研究は、次の通りである。まず、田仲一成博士が、一連の戯曲版本研究において、非常に優れた成果を上げておられる<sup>33</sup>。特に、博士の掲げられる演劇の發展モデルは、戯曲テキスト研究を行う上で、必ず參照しなければならないものである。次に黄仕忠氏の『『琵琶記』研究』<sup>34</sup>は、「作者篇」、「人物篇」などのほかに「版本篇」を設け、代表的な完本の版本について考察を加えておられる。また、韓國人研究者の金英淑氏『『琵琶記』

『版本流變研究』\*は、『琵琶記』の版本について完本から散齣集（金氏は「選曲集」とする）までを考察対象としておられる。ただし、筆者と見解を異にする部分もある。

本稿では、『琵琶記』を収録する散齣集を中心として、明代における戯曲テキストの變遷を探ることを目的としたい。

## 一、各テキストの書誌

『琵琶記』のテキストの書誌を確認しておきたい。完本と散齣集の主だったテキストを以下に挙げる。完本については、すでに指摘のあるように、3系統に分けられる<sup>※</sup>。完本については、代表的なものを挙げるに留める。①～⑧までが完本、⑨～⑳までが弋陽腔系テキストである<sup>※</sup>。なお、書名の後に括弧で本稿における略稱を記した。

### 完本

**陸貽典本系統（古本系統）**（①～③、⑧については、『古本琵琶記匯編』（中華書局 二〇〇七）所収本を参照した。）

①『新刊元本蔡伯喈琵琶記』（陸貽典本・「陸」）二卷、清・陸貽典抄本、北京・國家圖書館善本特藏部藏。

②『新刊巾箱蔡伯喈琵琶記』（巾箱本・「巾」）二卷、明刊、民國・武進董氏誦芬堂影印本、臺北・國家圖書館藏（?）。

③『凌刻臚仙本琵琶記』（凌刻本・「凌」）四卷、明末・凌濛初刻朱墨本、北京師範大學など藏。

### 汲古閣本系統（通行本系統）

④『琵琶記』（汲古閣本・「汲」）二卷、明末・毛晋汲古閣刻本、『汲

古閣六十種曲』所収本。

⑤『李卓吾先生評琵琶記』（李卓吾本・「李」）二卷、萬曆年間容與堂刻本、『古本戲曲叢刊』初集所収本。

⑥『陳眉公批評琵琶記』二卷、明・陳繼儒評、暖紅室刊。

**節略本**（簡略化したテキストだが、ここでは假に完本を含む。）

⑦『新刊摘匯奇妙戲式全家錦囊伯喈』（『風月錦囊』・「風」）一卷、明・徐文昭編輯、嘉靖三十二年（一五五三）詹氏進賢堂重刊、スペイン・エスコリアル王立圖書館藏。『善本戲曲叢刊』（臺灣學生書局 一九八四）所収本。

⑧『蔡伯喈』殘本二冊、抄本、一九五八年廣東潮州出土、廣東省博物館藏。

**散齣集 1群**（⑨、⑬～⑳は『善本戲曲叢刊』、⑩～⑫は『海外孤本晚

明散齣集三種』（上海古籍出版社 一九九三）による。）

⑨『新鐫梨園摘錦樂府菁華』（『樂府菁華』・「菁」）四卷、豫章劉君錫輯、書林三槐堂王會雲梓、萬曆庚子（二十八年、一六〇〇）刊。

英國・オックスフォード大學ボドリアン圖書館藏。豫章は江西省にある地名で、地方戲が多く生まれた土地柄である。出版元は王氏の三槐堂とあるが、傳田章氏によれば、明代に三槐堂という名稱を使用してゐるのは、『重校北西廂記』二卷の王敬喬、『新刻名公神斷明鏡公案』七卷の王崑源があるという<sup>10</sup>。このうち王敬喬は、當時の出版の中心地、福建建陽の書坊であることがわかってゐることから、『樂府菁華』の出版元も、建陽と関わりのある書坊と考えられる。

⑩『新鐫精選古今樂府滾調新詞玉樹英』（『玉樹英』・「英」）五卷、殘本（目錄と卷一第二八葉までおよび卷二第一葉のみ現存）。汝川黃文華選輯、書林余紹崖選輯、「皇明萬曆己亥歲季秋」（萬曆二十七年、一五九九）序。黃文華の本貫と思われる汝川は江西臨汝のことである

\*10。なお、黄文華の名は⑬『詞林一枝』・⑭『八能奏錦』にも見える。

余紹崖の余氏は福建建陽の代表的な書坊である。デンマーク・コペンハーゲン王立圖書館藏。

⑪『梨園會選古今傳奇滾調新詞樂府萬象新』（『萬象新』・〔萬〕）前集四卷、後集四卷（目録（第一葉原缺）と前集四卷の一部のみ現存）、安成阮祥宇編、書林劉齡甫刊行。阮祥宇の本貫安成は江西の古い地名である\*11。デンマーク・コペンハーゲン王立圖書館藏。

⑫『精刻彙編新聲雅襍樂府大明天下春』（『天下春』・〔天〕）八卷、卷四から卷八までのみ現存。『琵琶記』を収録していたと推定される巻が失われている。編纂者、刊刻書坊は不明。オーストリア・ウィーン國立圖書館藏。

⑬『鼎鑊微池雅調南北官腔樂府點板曲響大明春』（『大明春』または『萬曲明春』・〔大〕）六卷、扶搖程萬里選、冲懷朱鼎臣集、閩建書林金魁<sup>12</sup>繡。朱鼎臣は、『鼎鑊全像唐三藏西遊傳』十卷（萬曆刊）、

『新刻音釋旁訓評林演義三國志史傳』に、編纂者としてその名が見える。尊經閣文庫藏。

## 散齣集 2群

⑭『鼎刻時興滾調歌令玉谷新簧』（『玉谷新簧』・〔玉〕）目録では全五巻とあるが、實際は首巻・上巻・中巻・下巻・壹巻・貳巻という變則的な六巻構成。各巻で異なる人物が編纂者と刊刻者として掲げられており、複数の編纂過程を経ていることがうかがわれる。首巻巻頭では、「八景□□□選輯」、「書林□□□繡梓」（□は空格を示す）と削り取られ、編纂者・刊刻者ともに不明である。上巻には吉州景居士彙選・書林劉次泉繡梓（劉次泉の3字は埋め木によるものか）、壹

巻には吉州景居士選輯・書林廷禮繡梓とある。また書名も各巻で異なっている。首巻は先に掲げたとおり。上巻・中巻・下巻・貳巻は「鼎鑊精選增補滾調時興歌令玉谷調簧」、壹巻は「鼎鑊精選增補滾調時興歌令玉谷新簧」となっている。上巻・中巻・下巻の“谷調簧”の3字は他の字と比べると埋め木がなされているように見え、もともととは別の書名であった可能性がある。中巻の巻末には「玉振金聲 中巻終」とあり、このため傅芸子氏は、元來の書名は「玉振金聲」であったと推定されている\*12。一方表紙には、「玉谷調簧」「書林廷禮梓行」と

ある。更に各巻の字體を見ると、首巻では中層の字體が、他の巻の中層と比べて明らかに異なっている。以上のことを総合すると、『玉谷新簧』の成書過程は次のようなものが考えられる。書林廷禮以外の書坊で出版された首巻と上中下巻に、書林廷禮が壹巻・貳巻を付けて一冊としたのが現在の『玉谷新簧』ではないだろうか。實際の成立は刊記の「萬曆庚戌（三十八）年（一六一〇）」よりもさかのぼるのかもしれない。なお上巻巻頭に見える書林劉次泉（？一五九〇～一六四四）は、刻工の出身地として知られる徽州歙縣（安徽省新安）の人。⑮『摘錦奇音』の編纂者龔正我も同じ出身地である。内閣文庫藏。

⑮『新刊徽板合像滾調樂府官腔摘錦奇音』（『摘錦奇音』・〔摘〕）六巻、徽歙龔（龔か？）正我選輯、敦睦堂張三懷繡梓、萬曆三十九（一六一一）年刊。卷五・卷六の巻頭には、龔正我・張三懷のほかに苕潭張德郷校正とある。苕潭は福建の地名であるので、敦睦堂は福建と關係のある書坊と思われる。内閣文庫藏。

⑯『新刻京板青陽時調詞林一枝』（『詞林一枝』・〔詞〕）四巻、玄明黄文華選輯、瀛賓郝綉甫同纂、閩建書林葉志元繡梓。刊記に「萬曆新歲孟冬月葉志元綉梓」とあるものの、具體的な年は不明。内閣文庫藏。

⑰『鼎雕崑池新調樂府八能奏錦』（『八能奏錦』・「八」）六卷（卷二～卷四原缺）、汝川黃文華精選、書林蔡正河繡梓。刊記に「皇明萬曆新歲愛日堂蔡正河梓行」とある。「新歲」が具體的に何年を指すのかは不明。愛日堂については、『全漢志傳』「東漢」の巻頭に「愛日堂繼葵劉世忠」と見え、本來劉氏の書坊の愛日堂もあったことが知られている。この『全漢志傳』巻二には「克勤齋文臺余世騰」とあることから、『全漢志傳』ははじめ余氏の書坊で刊刻された後、劉氏がその版木を用いて後印したものと推定されている<sup>\*17</sup>。以上のような例から、『八能奏錦』の愛日堂も蔡正河の書坊ではなく、劉氏によって刊刻された版木を、蔡正河が再版した可能性も考えられる。内閣文庫藏。

⑱『新鐔天下時尚南北徽池雅調』（『徽池雅調』・「徽」）二卷、閩建書林熊稔寰彙輯、潭水燕石居主人刊梓。熊稔寰については、明・王穉登撰、屠隆評釋『屠先生評釋謀野集』四卷に「萬曆四十四年建陽書林熊稔寰燕石居刊」<sup>\*18</sup>とあることから、『徽池雅調』では同一人物の本名と號（あるいは書坊名）を並べて記していると思われる。

⑲『新鐔天下時尚南北新調堯天樂』（『堯天樂』・「堯」）二卷、豫章饒安殷啓聖彙輯、閩建書林熊稔寰繡梓。體裁は『徽池雅調』とほぼ同じ。<sup>\*19</sup>

⑳『新選南北樂府時調青崑』（『時調青崑』・「時」）四卷、江湖黃儒卿彙選、書林四知館繡梓、清初刻本<sup>\*20</sup>。刊刻元の四知館は、嘉靖年間の人楊金（字麗泉）の福建の書坊として有名。版面は上下二層に分かれ、上層に崑山腔の散齣、下層に弋陽腔系である青陽腔の散齣をそれぞれ収録。

⑨～⑳までの散齣集は、一部刊刻者不明のものも存在するが、ほとんどが福建の書坊で刊刻されている點は注目に値するであろう。また、版面についても、上下二層、あるいは上中下三層に分けられている點が共通している。三層の場合、中層は小唄の類を収めるものが多い。このように、収録する内容だけでなく、刊行地域・體裁なども共通するということは、これら散齣集が弋陽腔系の演目を収録するテキスト群として、一つのグループを構成していると言うことができる。さらに言えば、ある傾向を同じくするテキストが、限られた地域で集中的に出版されているということは、出版物として互いに影響関係にあることが推測されるであろう。

## 二、完本『琵琶記』テキスト系統の諸問題

『琵琶記』の場合、完本が比較的早い時期に成立していることから、弋陽腔系テキストは完本を母胎として成立・發展してきている。そこで、はじめに完本『琵琶記』の書誌について、もう少し詳しく見ておくことにしたい。

先に紹介したように、完本『琵琶記』テキストは、3つの系統に分けることができる。一つは清代の藏書家陸貽典の鈔本①『元本蔡伯喈琵琶記』（以下、陸貽典本）<sup>\*21</sup>を代表とする陸貽典本系統と、明末に刊行された④『汲古閣六十種曲』に収める『琵琶記』（以下、汲古閣本）を代表とする汲古閣本系統、そして、⑦『風月錦囊』及び廣東出土の⑧『蔡伯喈琵琶記』の節略本系統である。

陸貽典本系統と汲古閣本系統を分ける相違點とは何か。最も大きな點は、汲古閣本に、第八齣「文場選士」の場面が挿入されていることである。これにより、第八齣以降、陸貽典本系統と汲古閣本系統とでは一齣

ずつずれが生じている。そのほかには、陸貽典本系統第二十八齣、汲古閣本系統第二十九齣の臺詞の位置が兩者で異なっている（陸貽典本系統では【意多嬌】の前、汲古閣本系統では【閩黑麻】【前腔】の後）こと、陸貽典本系統第四十一齣（凌刻本は第四十二齣）が、汲古閣本系統には無いこと、などの違いが存在する。

#### （1）陸貽典本系統（古本系）

陸貽典本の正名に見える「元本」が、元刻本ではなく原本を意味することは、諸氏の指摘するとおりであろう<sup>22</sup>。陸貽典による康熙十三（一六七四）年の跋には、順治十五（一六五八）年に錢曾より借り受けたと記され、あわせて錢氏藏の『琵琶記』の書誌が詳しく述べられている。陸貽典の跋は、戊戌（順治十五年）三月五日付の「舊題校本琵琶記後」と甲寅（康熙十三年）仲冬廿七日付の「手録元本琵琶記題後」とがあり、この二文を総合すると次のような事情が明らかとなる。以下におおよその内容を記してみよう。

錢曾はもともと元本と郡刻本の二種類の刊本を所藏していた（のち、この二本は太興の鹽業で財をなした季寓庸の子で順治四年（一六四七）の進士である季振宜、字は洗兮、號は滄葦の手に渡り、そのまま行方が分からなくなったという）。元本は、嘉靖戊申（一五四八）の刊行とあり、初めの一葉と後ろの二葉が脱落、毎葉二十八行三十字、上下二卷、折數・篇目は設けない。更に陸氏はこれと郡刻本とを校勘したところ、脱落部分は郡刻本ではきちんと埋まっており、あとはすべて異同はない。ただ、元本では末尾から三葉目に半分が「横裂」し、ここではじめて兩者に異同が生じるところから、郡刻本は紛れもなく元本の翻刻本である。

元本上巻の卷末には、四人の刻工名（元本、王充・仇壽・以忠・以才刊（元本は王充、仇壽、以忠、以才が刊刻した））と、「嘉靖戊申（嘉靖二十七年、一五四八）七月四日重裝 三橋彭記」、その後には、「翻本、李澤・李潮・高成・黃金賢刊（翻刻本は、李澤、李潮、高成、黃金賢が刊刻した）」、「蘇州府閶門内中街路書／鋪依舊本命工重刊印行（蘇州府閶門内中街路書舖が、舊本に基づき刻工に命じて重刊として印刷した）」と記している。「三橋彭」とは、文彭、明・嘉靖年間（一五二二～六六）の長洲の人で、字は壽承、號は三橋または漁陽子といい、當時の著名な文人、文徵明（一四七〇～一五五九、名は璧。徵明は字）の長子である。このほか陸貽典は、元本の紙面の様子や、また抄寫に際してどのような方針で行ったかについても詳しく書き記しているため、陸貽典鈔本と他のテキストとを校勘する際には、この點を考慮に入れる必要がある。

陸貽典本を詳細に見てみると、形式面では、折數・篇目を設けず、曲牌名は陽刻であるが、本來は陸氏の叙によれば「元本曲名俱白文（原本の曲牌名は陰刻）」であった。このような點は、元刊の雜劇（「元刊雜劇三十種」）などと共通しており、元代から明代前期に刊行されたテキストに特徴的に見られるものである。陸貽典が見た元本も、こうした原始的な戲曲テキストの形態を持っていたものと言えよう。

陸貽典本の系統に分類されるのは、巾箱本（『新刊巾箱蔡伯喈琵琶記』、凌刻本などである。ただし、これらはすべて折數を設けている上、巾箱本は全四十三齣、凌刻本は全四十四齣とするなど、同系統とはいえず、陸貽典本と全く同じというわけではない。齣數の違いは、凌刻本では、巾箱本でいえば第三十八齣と第三十九齣の間に、別の一齣が挿入されていることによる。

巾箱本の特徴を見てみよう。全體として、本文は陸貽典本とほぼ一致

するが、第十四齣の最後の五言四句の詩は、陸貽典本には無く、汲古閣本と一致することは、部分的には陸貽典本と汲古閣本の中間的な性格を持つテキストということもできる。版面の特徴としては、すべての版心には、「忠孝傳」と刻されている。また、部分的に缺葉があり、卷上四十九、五十葉と卷下二十三、二十四、五十裏、五十一葉は、版木を彫り直して補われたものである。しかも、これらの補缺部分を詳細にみると、卷下二十三葉のみ他の補缺葉と異なっていることが分かる。それは、字體が異なっているだけではなく、他の補缺葉ではすべて陽刻であるのに、卷下二十三葉のみ曲牌と脚色名が陰刻であるという違いである。また、卷下二十三葉では、臺詞を示す箇所で「旦白（旦（趙五娘）の臺詞）」というように「白」を使っているが、その他の補缺葉では「旦云」のように「云」を使っている。巾箱本全體としては、卷下二十三葉と同じく「白」を使っているので、結論として、卷下二十三葉は古く、他の補缺部分はそれよりは新しいということになるだろう。補缺部分はおおむね巻の末尾で、最後に字數の調整を自由に行うことが可能であるので、本來の巾箱本の本文と、現在の補缺部分が果たして一致しているのかは疑問である。巻の途中にある卷下二十四葉の場合、裏の左から4行目から5行目にかけて7文字分を小文字で2行にしているのは、字餘りを調整するためではないかとも疑われる<sup>\*21</sup>。

凌刻本は、明代末期の書坊として有名な凌濛初が刊行したテキストである。凌氏の書坊は、套印本をはじめとする多色刷の高級な書籍や、また白話短編小説集『拍案驚奇』を刊行したことで知られている<sup>\*22</sup>。この凌刻本『琵琶記』は「臞仙本」と冠するが、この「臞仙」とは明の太祖朱元璋の第十七子で、芝居に詳しかった寧獻王朱權の號である。つまり、その彼がかつて藏していた由緒正しい本という宣傳文句であろう。

凌刻本には、版面の上部に、批評、所謂眉批が附されている。凌刻本の眉批では、「俗本」「時本」などという呼び方を用いて、他のテキストの異同を誤りとして退けている。これは、「古本琵琶記」原本の『琵琶記』に近づけ、さらにその復元をしようとし、自らの編纂した『琵琶記』こそが最善のテキストであることを強調しようとする意圖を端的に示していると言えよう。

## （2）通行本系

一方、元本と一線を畫するのが、④汲古閣六十種曲『琵琶記』（明末刊）を代表とするグループである。陸貽典本と大きく異なるのは、折數・篇目を設けている點、「文場選士」（汲古閣本では第八齣）という陸貽典本系統には見えない部分が増補されている點、また、汲古閣本第二十九齣「乞丐尋夫」、陸貽典本では【鵠搗練】から始まる段において、はじめの【鵠搗練】から【清江引】、その直後の【鷓鴣天】のあとに陸貽典本では末（張大公）の白が入るが、汲古閣本ではこの白がそっくりそのまま【鬪黑麻】【前腔】の後ろに移動している點などである。この系統には⑤容與堂刊『李卓吾先生評琵琶記』、⑥『陳眉公批評琵琶記』等が含まれる。

容與堂本は、巻末の最後の二葉は手書きで補われている。また他本では【前腔】と表記するところ、このテキストには全く【前腔】の表記がなく改行することで区別している。ちなみに同じ容與堂刊行の『李評幽閨記』（または「拜月亭」）には【前腔】の表記が使われている。

本稿では、弋陽腔系散齣集より刊行年代のおくれる汲古閣本を校勘の対象としたのは、陸貽典本の對極の關係にある系統の終着點の一つであると考えからである。

汲古閣本系統に關して、凌刻本の第五齣【尾犯序】の眉批に、次のような興味深い記述が見られる。

諸本「思省」下、逐句増生問語、極似弋陽醜態。

(諸本では「思省」の下に一句ごとに生(蔡伯喈)の問いかけのせりふを増やしているが、弋陽腔の醜態にきわめてよく似ている。)

實際、凌刻本を含む陸貽典本系統のテキストでは、唱の一句一句の間に白が挿入されることはあまり多くなく、ここで凌氏が非難する「逐句増生問語」とするのは、汲古閣本系統のテキストに當てはまることなのである<sup>33</sup>。凌氏の言う「弋陽」とは、おそらく崑山腔以外の劇種を総稱しているのであつて、弋陽腔系の戯曲を蔑んでいることが看取できるであらう。この眉批は、當時出版されていた完本系『琵琶記』の諸テキストが、弋陽腔系の影響を少なからず受けていたことを示しているよう。

以上の2系統のほかに、もう一つ忘れてはならないのが、⑦『風月錦囊』(スペイン・エスコリアル王立圖書館藏)所收の「新刊摘匯奇妙戲式全家錦囊伯皆」(『善本戲曲叢刊』所收)である。巻頭には、「汝水雲崖 徐文昭 編輯」「書林 詹氏 進賢堂 梓行」とあるが、徐文昭(天順八年、一四六四〜嘉靖三十二年、一五五三)は、「汝水」はおそらく「汝川」であらうから、江西の人であらう。詹氏進賢堂は建陽の書坊である。嘉靖年間の刊記があるが、實際は明の洪武年間か永樂年間に初刻され、成化年間と嘉靖三十二年に、それぞれ重刻されたと考えられている<sup>34</sup>。またこの「全家錦囊伯皆」は、完本『琵琶記』のようにすべてを収録しているのではないので、刪改本と言ふべきものである。

### 三、弋陽腔系テキストの系統の諸問題

#### (1) 弋陽腔とそのテキストについて

本稿で取り上げる弋陽腔は、中國の地方劇の一種である。これはいつたい、どのような來歴をもつ演劇なのであらうか。

元代には、北方に起源を持つ雜劇と呼ばれる演劇形態が、大いに發展、流行した。北曲とも呼ばれる雜劇は、明代になると、専ら明の宮廷においてのみ上演されるようになり、民間では徐々に衰退していった。これに代わつて勃興してきたのが、南方の音樂である南曲を用いた南中國の地方劇であつた。主なものとしては、崑山腔(崑曲とも。腔は唱の節回しのこと)、海鹽腔、弋陽腔、餘姚腔などが挙げられる。それぞれ發祥地の名が冠せられ、崑山腔は江蘇省、海鹽腔と餘姚腔は浙江省、弋陽腔は江西省がその故郷である。

崑山腔は、蘇州一帯を中心として行われ、特に比較的上流階級の人々(士大夫)によつて受容された。發祥の起源は十四世紀中葉とされるが、大きな轉機は十六世紀中頃、魏梁輔(生没年不明)による改良が行われたのに加え、梁辰魚(一五一九?〜一五九一?)の『浣紗記』が大評判となり、再び盛んに行われるようになったと言われている。そして、現代に至るまで、繼承・上演されている。また、海鹽腔も、上流階級に受容された演劇であつた。その上演の様子は、『金瓶梅』の中で、西門慶が邸宅に劇團を呼んだことなどが描かれていることで知られる。

では、上流階級以外の人々は、どのような演劇を楽しんでいたのだろうか。それは、餘姚腔・弋陽腔であり、特に弋陽腔は、當時最も流行し廣く受け入れられていた地方劇であつた。「滾調」と呼ばれる獨特の節回しを伴つた唱の挿入をはじめ、打樂器を用いたにぎやかな伴奏と、卑俗な言葉遣いなどが特徴で、上流階級向けの崑山腔とは對照的であつたと當時の記録に残されている。とりわけ、明代末期に至つて、弋陽腔はさまざまに變化を遂げ、その後の地方劇に大きな影響を與えることとなつた。このような過程があるため、弋陽腔の影響下に生じた地方劇は、



「弋陽腔系」と総稱される<sup>\*25</sup>。

先に述べたように、弋陽腔系テキストの共通点の一つとしては、上下二層、あるいは上中下三層からなる版面をもつことが挙げられる。また、演目の一場面を描いた挿畫が巻頭、または途中に附されている（ただし『堯天樂』は除く）。これら共通する點は、弋陽腔系テキストが一つのグループであることを示すと同時に、弋陽腔系テキストが單に脚本を記録しただけの本なのではなく、娛樂書としての性格が強いことをも示していると言えるだろう<sup>\*26</sup>。

## （2）弋陽腔系テキストの系統分類——1群

それでは、例を挙げながら、各散齎集の系統分類を試みたい。最初に取り上げる「長亭分別」は、科擧受験のため都へ旅立つ伯喈と、それを見送る妻五娘の別れの場面である。収録しているテキストは、⑨『樂府菁華』〔菁〕、⑩『玉樹英』〔英〕、⑬『大明春』〔大〕、⑭『玉谷新簧』〔玉〕、⑮『摘錦奇音』〔摘〕、⑳『時調青崑』〔時〕の六種である。原本において、曲辭の部分はゴシック體、すこし小さめの文字で刻されている部分は斜體字、小文字はそのままの字體で示す（以下同じ）。また、完本系統と比べて増補されている部分については、傍線を付す。各テキストの略稱の上に付けた「完」は完本系、「1」は弋陽腔系1群、「2」は弋陽腔系2群を示す。

### 例1「長亭分別」【本序】第三支【前腔】

完〔陸〕〔生唱〕**寬心須待等**。我肯戀花柳、甘爲萍梗。

完〔汲〕〔生〕娘子、你**寬心須待等**。我肯戀花柳、甘爲萍梗。

完〔風〕〔生〕**寬心須待等**。肯戀花柳、甘爲萍梗。

1〔菁〕〔生〕**寬心須待等**。妻。我、常輕黃允之作事、素慕宋弘之爲人。

說甚麼、紅樓偏有意。那知我、翠館實無情。我豈肯戀花柳、甘爲萍梗。〔旦〕解元、若得成名、須早寄一封音書回報。〔生〕五娘、此時狼烟烽起。只愁音書阻隔。

1〔英〕〔生〕**寬心雖待等**。妻。我、常輕黃允之作事、素慕宋弘之爲人。

說甚麼、紅樓偏有意。那知我、翠館實無情。我豈肯戀花柳、甘爲萍梗。〔旦〕解元、若得成名、須早寄一封音書回報。〔生〕五娘、此時很烟烽起。只愁音書阻隔。

1〔大〕〔生〕**寬心須待等**。妻。××××××××××××××××說甚麼、

紅樓偏有意。那知我、翠館實無情。我×肯戀花柳、甘爲萍梗。〔旦〕解元、若得成名、×早寄一封音書回來。我的夫。〔生〕五娘、此時狼烟烽起。只愁音書阻隔。

2〔玉〕〔生〕**寬心須待等**。妻。我常輕黃允之作事、素慕宋弘之爲人。〔滾〕

說甚麼、紅樓偏有意。那知我、翠館本無情。××肯戀花柳、甘爲萍梗。〔旦〕解元、若得成名、須早寄一封音書回報。〔生〕〔滾調〕五娘

妻、夫婦恩情豈忍離、只因催促赴春闈。天涯海角情難盡、只愁關山阻隔時。

2〔摘〕〔生〕**寬心須待等**。妻。你丈夫雖無宋弘之高義、決不學王允之無情。說甚麼、紅樓偏有意。那知我、翠館實無情。我豈肯戀花柳、甘

爲萍梗。〔旦〕解元、若得成名、須早寄一封音書回來。〔生〕此時狼烟烽起。只怕音書阻隔。

2〔時〕〔生〕**寬心須待等**。妻。你爲何有興而來、沒興而回。你丈夫雖無

宋弘之高義、決不學王允之無情。勿得這等炮燥。妻。寬心須待等。說甚麼、紅樓偏有意。那知我、翠館實無情。××肯戀花柳、甘爲萍梗。〔旦〕解元、若得成名、須早寄一封音書回來。〔生〕五娘、此時狼

烟烽起。只怕音書阻隔。

〔譯：『玉樹英』：「伯喈が唱う」安心して歸りを待つように。「せりふ」妻や、私は黄允のことを輕んじているが、宋弘の人となりは慕

っておるぞ。「唱う」紅樓（妓樓）には興味が無いし、翠館（紅樓に同じ）にはもとより思いはないぞ。私が花や酒に戀々したり、浮き草をなったりするものか。「五娘がいう」あなた、もし名を成したら、すぐにお手紙を送って下さいね。「伯喈がいう」五娘、その時にいくさが起こり、手紙が届かないことにならねばよいが。」

まず、⑨『樂府菁華』と⑩『玉樹英』の両者がほぼ同じ本文を持ち、非常に近い関係にあることがわかる。⑬『大明春』は「我、常輕黃允之作事、素慕宋弘之爲人」の部分で、またこのほかの部分で誤刻によるものと思われる異同も多少散見するが、『樂府菁華』『玉樹英』と基本的に一致するところが多いことから同一系統にあると思われる。これらをまとめて1群とする<sup>※10</sup>。

⑮『摘錦奇音』は唱の部分では⑨『樂府菁華』とほぼ同じであるが、「你丈夫雖無宋弘之高義、決不學王允之無情」は目立つ異同である。「黃允」を「王允」に作るのは、「黃」と「王」の文字の音通から、両者が混同されていたことが考えられる<sup>※11</sup>。1群では、伯喈の臺詞「常に黃允の行爲は輕蔑しているし、ふだんから宋弘の人となりを慕っている。」とするところを⑮『摘錦奇音』では、「わたしは宋弘ほどの高義はないけれども、決して王允のような無情なことはまねしないぞ。」と改めている。この臺詞は、後に伯喈が科擧に及第して丞相の娘牛氏と結婚することを知っている讀者（または觀客）にとつてはなかなか興味深いところである。別れ際に裏切ることはしないとわざわざ約束の言葉を口にさせることで、のちの裏切りを鮮明にする効果的な改編と思われる。

最後の⑳『時調青崑』は他本より刊行が遅れることもあり大きく改編され、例えば「寛心須待等」が二回繰り返されたり、新たにせりふが付

け加えられたりしている。「你丈夫雖無宋弘之高義、決不學王允之無情」の部分は⑮『摘錦奇音』と一致し、⑮『摘錦奇音』の系統を受け継いでいる。

ここでさらに1群とした⑨『樂府菁華』、⑩『玉樹英』、⑬『大明春』の關係は、どのようになっているだろうか。

例2「長亭分別」【本序】（①陸貽典本は【尾犯序】、④汲古閣本は【犯尾序】）第一支【前腔】（⑬『大明春』は【前調】）（陸貽典本系、汲古閣本系ともに第五齣）

完〔陸〕我×年老爹娘。×××望伊家。××××××××××看承。  
完〔汲〕××年老爹娘。×××望伊家。××××××××××看承。  
完〔風〕我×年老爹娘。×××望伊家。××××××××××看承。  
1〔英〕我有年老爹娘。沒奈何望賢妻。×××須索要爲我好承承。  
1〔菁〕我有年老爹娘。沒奈何望賢妻。×××須索×與我好承承。  
1〔大〕我有年老爹娘。沒奈何望賢妻。××××××××與我好承承。  
2〔玉〕我有年老爹娘。沒奈何望賢妻。×××須索要與我好承承。  
2〔摘〕我有年老爹娘。沒奈何望賢妻。早晚間須索×與我好承承。  
2〔時〕我有年老爹娘。沒奈何望賢妻。×須索須索×與我好承承。  
（譯：『玉樹英』：私には年老いた両親があるが、わがためにとくよく面倒をみておくれと妻に頼むよりかはなし。）

例3「上表辭官」第二支【神仗兒】（陸貽典本十五、汲古閣本十六）

完〔陸〕〔生〕揚塵舞踏。〃〃〃。見祥雲縹渺。  
完〔汲〕〔生〕揚塵舞踏。揚塵舞踏。見祥雲縹渺。  
完〔風〕〔生〕揚塵舞踏。揚塵舞踏。見祥雲縹渺。想黃門已到。

1〔英〕〔生〕形庭隱耀。〔又〕下官舉目一看、忽然見那一朵祥雲、就相似

我家鄉一般。見祥雲縹渺。

1 「菁」[生]形庭隱耀。「重」下官舉目一看、忽然見那祥雲一朵、就相似我家鄉一般。見祥雲縹渺。

1 「大」[生]形庭隱耀。「又」下官舉目一看、忽然見那一朵祥雲、就×似我家鄉一般。見祥雲縹渺。

2 「玉」[生]形庭隱耀。「又」下官舉目一看、忽然見那×朵祥雲、就相似我家鄉一般。見祥雲縹渺。

2 「摘」[生]形庭隱耀。昔有古人仁傑望雲思親、今日伯喈要見爹娘、看那朵祥雲之下想、就是我家鄉了。見祥雲縹渺。

(譯：『玉樹英』：「伯喈が唱う」宮廷は光を隠す。「せりふ」目を上げて見れば、ひとむらの祥雲が現れ、わが故郷にいるようだ。

「唱う」祥雲のたなびくさまをみるようだ。)

例2・例3は、刊刻年代の順に並べた。⑩『玉樹英』一五九九年刊、⑨『樂府菁華』一六〇〇年刊、⑭『玉谷新篋』一六一〇年以前刊、⑮『摘錦奇音』一六一一年刊、⑳『時調青崑』明末刊、㉓『大明春』は刊刻年不明であるが、本文が⑨『樂府菁華』に近いため、その次に置いた。

まず、⑩『玉樹英』と⑨『樂府菁華』は非常に近い関係ではあるが、直接的な関係があるとするよりは、両者に共通する祖本の存在を想定するのが妥当と思われる。

このことは、収録する演目からもある程度裏付けることができる。『樂府菁華』、『玉樹英』が共通して収録する演目には、「長亭分別」、「上表辭官」、「剪髮送終」、「中秋賞月」、「書館相逢」がある。これらと比較してみると、例に挙げたような異同が存在するものの、同系統とすることができ。しかし、『玉樹英』では、さらに五つの演目（「書館思親」、「描畫眞容」、「詰問幽情」、「拒父問答」、「書館托夢」）を収録する。このうち「書館托夢」は完本『琵琶記』に對應する部分がなく、「新增琵琶記」と銘打つているところから、あらたに作られた演

目と思われる。また「詰問幽情」「拒父問答」に限っては、〈滾調〉の唱が増補されており、他の部分とはやや異質である。このことは、『玉樹英』が『琵琶記』を収録する際に、複数の祖本を利用した可能性を示すものだろう。

『大明春』は、【前腔】（前の曲牌と同じ曲牌であることを示す）ではなく【前調】という表記が使われている。これは、『大明春』卷一と卷四に限って見られるものである。【前調】は、『北詞廣正譜』という北曲の曲譜にも見られ、北曲由來の言い方と考えられる。『大明春』において、【前調】の表記が卷一と卷四にのみ見られるのは、『大明春』の前半部分と後半部分とで、成立時期或いは祖本が異なることを示しているのかもしれない。

1 群に分類できる散齋集には、このほかに⑪『萬象新』がある。「書館相逢」を例にあげてみてみよう。牛氏の仲立ちによって、蔡伯喈と趙五娘とが再會する段である。収録しているのは、⑨『樂府菁華』[菁]、⑩『玉樹英』[英]、⑪『萬象新』[萬]、⑮『摘錦奇音』[摘]、⑳『時調青崑』[時]。（『玉樹英』は『樂府菁華』とほぼ同文であるため、『時調青崑』は【太師引】を含む前半部分を缺くため、それぞれの表では省く）。

例4「書館悲逢」【太師引】【前腔】生（伯喈の唱）

完〔陸〕〔生〕**丹青匠由他主張。須知漢毛延壽誤了王嬙。**〔白〕且謾着。若

是箇神佛、背面必有標題。〔見詩介〕呀。這詩不是它在先有的。墨跡兀自不曾乾、敢是却纔題的。〔猜介〕什麼人入我書坊里做怎麼。

完〔汲〕〔生〕**丹青匠由他主張。須知道毛延壽誤了王嬙。**若是個神圖佛像、

背面必有標題。×××待我轉過來看。呀。元來有一首詩在上面。〔讀詩介〕這廝好無禮、句句道着下官。等閑的怎敢到此。想必夫人知道、待我問×便知分曉。夫人那裡。

完〔風〕〔生〕丹青匠由他自主張。須知漢毛延壽悞了王嬙。

1〔菁〕〔生〕丹青匠由他主張。須知漢毛延壽悞了王嬙。伯皆一時好痴呆。  
既是甚麼故事。自有標題待我轉過來看。呀、原來有一首詩在上面。  
這廝好無礼、句と道着下官。等閑的怎敢到此。想必夫人知道、待我問他便知分曉。

2〔萬〕〔生〕丹青匠由他主張。須知漢毛延壽悞了王嬙。伯皆一時好痴呆。  
既是甚麼故事。自有標題待我轉過來看。呀、原來有一首詩在上面。  
這廝好無礼、句と道着下官。等閑的怎敢到此。想必夫人知道、待×問×便知了。

2〔摘〕〔生〕丹青匠由他主張。須知漢毛延壽悞了王嬙。叫院子。〔丑〕有。  
〔生〕這軸小畫兒緣何掛在這裡收下來。原來上面有標題。〔讀詩介〕你掛時有詩沒有。〔丑〕掛時沒有。〔生〕這墨迹尚然未乾、諒題詩的去也未遠。快請夫人出來。〔丑〕夫人有請。

〔譯：『樂府菁華』：「伯喈が唱う」繪師は好き勝手にやりおる。漢の毛延壽が王昭君の運命を誤らせたことを知るべきぞ。〔せりふ〕これはうっかりしておった。何かの物語なら、題があるだろう。そちらに回って見てみよう。やや、なんと詩が書いてある。こやつなんと無禮な。私のことを言っている。いい加減な者がここに入ってくるはずがない。きつと夫人が知っているはず、問いただしてみよう。〕

『萬象新』と『樂府菁華』との異同は、ほぼ同文と言える程度の誤差の範囲内であろう。なお、『萬象新』と『樂府菁華』とは、「剪髮葬親」（趙五娘が亡くなった舅の墓を作ろうとし、その資金を得るために自分の髪を賣る段）においても、同様の傾向が認められる。

『玉谷新簧』は、『樂府菁華』とおおむね一致し、1群と近い関係にある。ただし、例に引いた箇所以外でも（滾調）とする部分が頻繁に挿

入されていることから、1群をもとに増補したテキストと言える。また、このテキストは他のものよりやや複雑な成立過程をたどっているものと推定される。

### （3）弋陽腔系テキストの系統分類——2群

2群とした『詞林一枝』『堯天樂』『時調青崑』についても考察を加えたい。三者を含む「中秋賞月」を例に挙げる。ここは、牛丞相の娘牛氏と結婚した蔡伯喈が中秋の夜、故郷の家族のことを思つて気が沈んでいるところ、牛氏に促されて名月を愛でる段。収録するのは、⑨『樂府菁華』、⑩『玉樹英』、⑮『摘錦奇音』、⑯『詞林一枝』、⑰『堯天樂』、⑳『時調青崑』の各テキスト、及び完本の汲古閣本第二十八齣「中秋望月」。

例5「中秋賞月」【念奴嬌序】二つめの【前腔】貼（牛氏）の唱。

完〔陸〕光瑩。我欲吹斷玉簫、鵲鸞歸去、不知風露冷瑤京。環珮湿、似月下歸來飛瓊。那更、香鬟雲鬢、清輝玉臂、廣寒仙子也堪並。

完〔汲〕光瑩。我欲吹斷玉簫、鵲鸞歸去、不知風露冷瑤京。環珮湿、似月下歸來飛瓊。那更、香鬟雲鬢、清輝玉臂、廣寒仙子也堪並。

完〔風〕光瑩。我欲吹斷玉簫、鵲鸞歸去、不知風露冷瑤京。環珮×、似月下歸來飛瓊。那更、香鬟雲鬢、清輝玉臂、廣寒仙子也堪並。

1〔菁〕光瑩。我欲吹斷玉簫、鵲鸞歸去、不知風露冷瑤京。〔丑〕夜深了、好重露水。〔貼〕環珮湿、似月下歸來飛瓊。正是香鬟雲鬢温、清輝玉臂寒。那更、香鬟雲鬢、清輝玉臂、廣寒仙子也堪並。

1〔英〕光瑩。我欲吹斷玉簫、鵲鸞歸去、不知風露冷瑤京。〔丑〕夜深了、好重露水。〔貼〕環珮湿、似月下歸來飛瓊。正是香鬟雲鬢温、清輝玉臂寒。那更、香鬟雲鬢、清輝玉臂、廣寒仙子也堪並。

2〔詞〕光瑩。昔有秦穆公一女、名曰弄玉、配與蕭史爲妻、夫婦二人吹

簫于臺上、有一日鳳自天而下。曾有詩曰、鳳凰臺上鳳凰遊、鳳去臺空江自流。我欲吹斷玉簫、乘鸞歸去、不知風露冷瑤京。夜深了、好重露水。環珮濕、似月下歸來飛瓊。正是香霧雲鬟溫、清輝玉臂寒。那更、香霧雲鬟、清輝玉臂、廣寒仙子也堪並。（「蕭史」は原文ママ）

2〔摘〕光瑩。昔有秦穆公一女、名喚弄玉、後來配與蕭史爲妻、夫婦二人吹簫于臺上、×一日鳳凰自天而下。夫婦乘鸞而去、遺下一臺、名曰鳳凰臺。有詩爲証。鳳凰臺上鳳凰遊、鳳去臺空江自流。我欲吹斷玉簫、乘鸞而去、不知風露冷瑤京。夜深了、好重露水。環珮濕、似月下歸來飛瓊。那更、香霧雲鬟、清輝玉臂、〔淨〕適纔狀元把小姐比佐嫦娥、今晚看他在瑤臺之上、明月之下、真個生得標致得緊。〔滾〕正是香霧雲鬟溫、清輝玉臂寒。臨期雙樂普、對月兩嬋娟。就是廣寒仙子也堪並。（「蕭史」は原文ママ）

2〔堯〕光瑩。我欲吹斷玉簫、昔秦穆公生一女、名曰弄玉、配與蕭史爲妻、夫婦二人善能吹簫、起一臺名曰鳳凰臺、二人吹簫其上、後來乘鸞而去。曾有詩曰、鳳凰臺上鳳凰遊、鳳去臺空江自流。我欲吹斷玉簫、乘鸞歸去、不知風露冷瑤京。夜深了、好重露水。環珮濕、似月下歸來飛瓊。那更、香霧雲鬟、清輝玉臂、〔丑〕惜春、適纔狀元爺、把我小姐比作月里姮娥、今晚在此、坐在瑤臺之上、明月之下、真生得標致。正是香霧雲鬟溫、清輝玉臂寒。臨溪雙合浦、對月兩嬋娟。就是廣寒仙子俺小姐也堪並。

2〔時〕光瑩吹斷玉簫。昔秦穆公生一女、名曰弄玉、配與蕭史爲妻、夫婦二人善能吹簫、起一臺名曰鳳凰臺、夫婦二人吹簫其上、後來乘鸞而去。曾有詩云、鳳凰臺上鳳凰遊、鳳去臺空江自流。我欲吹斷玉簫、乘鸞而去、不知風露冷瑤京。××××××××××環珮濕、似月下歸來飛瓊。那更、香霧雲鬟、清輝玉臂、〔丑〕惜春、適纔狀元爺、把我小姐比作月里姮娥、今晚看他、坐在瑤臺之上、明月之下、真生得標

致。正是香霧雲鬟溫、清輝玉臂寒。臨溪雙合浦、對月兩嬋娟。就是廣寒仙子也堪並。（「蕭」は原文ママ）

（譯：『玉樹英』：光りたる、玉簫を吹き盡くし、鸞に跨り歸らんとすれば、思いがけぬことに天の都は風と露でひんやり。「侍女がいう」夜が更けて、露が付いております。「牛氏が唱う」佳人が夜露に濡れるさまは月下に戻る仙女飛瓊の美しさにまさる。まさにこれぞ「香霧雲鬟濕い、清輝玉臂寒からん」。香しき雲なすまげ、清らかに輝く玉なるかいな、廣寒仙子（嫦娥）にまごうほど。）

この例においても、完本と比べ、弋陽腔系テキストはせりふや唱を増やしていることが明らかであるが、弋陽腔系の1群と2群の間とは違いが見られる。1群と2群をわけるのは、冒頭部分にある「昔有秦穆公」から始まるせりふの有無である。その後の曲辭「香霧雲鬟、清輝玉臂」は、もともと杜甫の「月夜」「香霧雲鬟濕、清輝玉臂寒」を典故とする。弋陽腔系テキストでは、さらに「香霧雲鬟溫、清輝玉臂寒」の句を挿入するが、挿入位置は、1群の⑨『樂府菁華』・⑩『玉樹英』と2群の⑩『詞林一枝』では「那更、香霧雲鬟、清輝玉臂」の前、2群の⑮『摘錦奇音』・⑲『堯天樂』・⑳『時調青崑』では「那更、香霧雲鬟、清輝玉臂」の後になっている。このことから、⑩『詞林一枝』は、兩者の中間的性格を持つことがわかる。

では、ここで⑩『詞林一枝』は弋陽腔系テキストのどこに位置づけられるだろうか。『詞林一枝』は、刊記に「萬曆新歲孟冬月葉志元繡梓」とあることから、萬曆初年（一五七三年）の刊行と考えられている<sup>29</sup>。もしも假にそうなると、『詞林一枝』（同じく「萬曆新歲」の刊記を持つ⑰『八能奏錦』も）は、弋陽腔系テキストの中で、最も刊行が早いテキストということになる。しかし、この例のように、『詞林一枝』が1群と2群の中間的性格を持っていることを考えると、一六〇〇年刊⑨『樂

府菁華』や、一六一一年刊⑮『摘錦奇音』に先行すると考えるのはやや不自然であるかもしれない。1群の本文を持つテキストと2群のようなテキストの両者を折衷したテキストと考えるほうが、無理がないように思われる。

⑮『堯天樂』と⑯『時調青崑』とが、非常に近い関係であることは、この例から明らかであろう。特に唱い出しでは、⑮『摘錦奇音』・⑯『詞林一枝』が「光瑩。我欲吹斷玉簫」をはじめの二字のところまでせりふを挿入する形であるのに對し、⑮『堯天樂』・⑯『時調青崑』では「光瑩。我欲吹斷玉簫」のあとにせりふを入れ、そのあとにまた「我欲吹斷玉簫」と続けている。⑯『時調青崑』は刊行年代が遅れるので、『時調青崑』が『堯天樂』系のテキストを繼承しているということになるであろう。

増補されている部分の内容は、簫史と弄玉の有名な故事である。完本系テキストでは、この話は曲辭でのみ唱われているが、おそらくそれで十分分かるということなのであろう。弋陽腔系テキストでは、曲辭の後のせりふの中で故事の内容が語られており、こういったところに受容層の違いが現れていると考えられるだろう。

以上のことは、次の例からも確認できる。「描畫眞容」（舅姑の葬式を終えた趙五娘が、夫を訪ねて都へ上る決意をする段）を見てみよう。

例6は、弋陽腔系テキストで増補された箇所である。収録するのは、⑩『玉樹英』、⑬『大明春』、⑯『詞林一枝』、⑰『堯天樂』、⑱『時調青崑』。⑦『風月錦囊』は、弋陽腔系テキストとやや似る程度である（後述）。

例6「描畫眞容」【雁兒落】旦（趙五娘）の唱。

完（風）畫得粉妝成就。畫得他容顏好、畫只畫龐兒待厚。

1〔英〕待畫他瘦形骸真是醜。待畫他俊龐兒生成就。待畫他髮搜搜望孩兒、兩眼泪盈眸。待畫他肥胖些這幾年遭飢荒、只落得容貌消瘦。分

付毛延壽。錯弄了筆尖頭。全憑着五道士用機謀。

1〔大〕待畫他瘦形骸真是醜。待畫他俊龐兒生成就。待畫他髮搜搜望×兒、兩眼泪盈眸。待畫□肥胖些這幾年遭飢荒、只落得容貌消瘦。分付毛延壽。錯弄了筆尖頭。全憑着五道士用機謀。

2〔詞〕待畫他瘦形骸真是醜。待畫他髮搜搜望孩兒、兩眼泪盈眸。待畫他俊龐兒生成就。待畫他肥胖些這幾年遭飢荒、只落得容貌消瘦。分付毛延壽、×弄了筆尖頭。全憑着五道士用機謀。

2〔堯〕待畫他瘦形骸真是醜。待畫他粉臉兒生成就。只畫得髮搜搜衣衫蔽垢、畫不出孩兒睜睜兩眸。待畫他肥胖些兒畧帶厚、這幾年遇飢荒、只落得容貌消瘦。〔又〕又不是五道士用機謀、叮嚀囑付毛延壽、休賣弄×筆尖頭。又不是五道士用機謀、叮嚀囑付毛延壽、休賣弄他筆尖頭。

2〔時〕待畫他瘦形骸真是醜。待畫他粉臉兒生成就。只畫得髮搜搜衣衫蔽垢、畫不出孩兒睜睜兩眸。待畫他肥胖些兒畧帶厚、這幾年遇飢荒、只落得容貌消瘦。〔又〕又不是五道士用機謀、叮嚀囑付毛延壽、休賣弄×筆尖頭。〔又〕是前的部分を繰り返すことを示す

〔譯：『玉樹英』：彼を描こうとすれば瘦せた姿はまことに醜く、きれいな顔を描こうとすれば無理がある（？）。亂れた髪で子供を思いう姿を描こうとすれば兩目に涙があふれる。ふくよかなお姿を描こうとすればここ數年の饑饉で、すっかり瘦せ細ってしまった。〔漢代に王昭君を醜く描いた〕毛延壽に言いつければ筆を誤る。すべてこの五道士（？）の知謀が頼り。〕

いずれも第一句は一致するが、第二句以降異同が生じている。⑩『玉樹英』・⑬『大明春』のグループ（1群）と⑰『堯天樂』・⑱『時調青崑』のグループ（2群）とに分けることができる。また、ここでも例5の場合と同じように、⑯『詞林一枝』は、兩者の中間的な性格を示していることがわかるであろう。

#### 四、『風月錦囊』と弋陽腔系テキストとの関わり

では、⑦『風月錦囊』と弋陽腔系テキストとはどのような関係にあるのだろうか。以下に例を見ながら考えてみたい。先ほどの「描畫眞容」から例を挙げ、弋陽腔系の⑩『玉樹英』を代表させて、『風月錦囊』と対照させてみよう。

例7『風月錦囊』「描畫眞容」【新增】と『玉樹英』「五娘描畫眞容」

〔風〕【新增】想眞容未寫淚先流、要相逢不能得勾、除非夢裡有。全憑一管筆、描不出兩般愁。

〔英〕【新水令】想眞容未寫淚先流、要相逢不能得勾。泪眼描來易愁容寫出難。全憑一枝筆、描不成畫不就萬般愁。親喪荒垆要相逢。除非是魂夢中有。公婆、你自從孩兒去後、不曾得半載觀悅、我只記得。

（譯：『風月錦囊』：繪姿を描くよりまず涙が流れ、會うことかなわず。この筆一本に頼つても、二つの愁いを描き出すことはできませぬ。）

『風月錦囊』の【新增】が、『玉樹英』の【新水令】に完全に一致はしないものの、酷似していることが分かる。續く『玉樹英』の【駐馬聽】

〔雁兒落〕【疊字錦】も、同様に對應している。

「描畫眞容」の場面は、もともと各テキスト系統間で、異同の幅が大きく現れている段である。完本の系統間では、汲古閣本系統は【鵲橋練】【三仙橋】【憶多嬌】（陸貽典本作【意多嬌】）【鬪黑麻】の順に並んでいるが、特に臺詞の挿入箇所が異なっている。弋陽腔系テキストでは、曲牌は【鵲橋練】【新水令】【駐馬聽】【雁兒落】【疊字錦】【三仙橋】【清江引】【琵琶詞】【憶多嬌】【鬪黑麻】【憶多嬌】（『玉樹英』による）となっており、完本系テキストと比べ、【新水令】から【疊字錦】

まで、【清江引】、「琵琶詞」、【憶多嬌】が増補されているのである。つまり、完本系テキストから、『風月錦囊』の段階、そして弋陽腔系テキストの段階へと、變化していったことが分かるのである。

もう一例、弋陽腔系テキストと『風月錦囊』の関係がうかがわれる箇所を挙げておこう。「臨粧感嘆」の末尾で、⑮『摘錦奇音』と⑦『風月錦囊』のみ共通する曲辭である。

例8「臨粧感嘆」【尾聲】（□は空格）

〔摘〕【尾聲】從他去後知甚所、奴×把双親勤侍奉、專望兒夫衣錦歸。

〔風〕【尾聲】他從□後知甚所、我勤把双親來侍奉、專待兒夫返故□。

（譯：『摘錦奇音』：彼が去りてのち何れの処にいるかを知らず、私は二親にお仕えし、ひたすら夫が故郷に錦を飾る日を待ち望む。）

以上のように、『風月錦囊』と弋陽腔系テキストの間には、完本系との関係よりも改編の過程において、非常に近い関係が認められる。ただし、直接的な関係があるとはまだ言い切れないようである。たとえば、『風月錦囊』「上表辭官」では、一部省略して収録しているが、弋陽腔系テキストでは省略されていないということを考えると、弋陽腔系テキストが直接『風月錦囊』を参照して編纂されたとは言えないだろう。少なくとも『風月錦囊』を生んだ系統が、弋陽腔系テキストに非常に大きな影響を与えていることは間違いないであろう。また、『風月錦囊』と弋陽腔系テキストの刊行場所、いずれも福建建陽であるという点は考慮されるべきだろう。

また、次の例9「臨粧感嘆」は、趙五娘が一人鏡に向かって夫伯喈に思いを馳せる場面である。陸貽典本では【破齋陣】から始まる箇所（巾箱本第八出）、汲古閣本では第九齣、⑯『詞林一枝』・⑰『八能奏錦』・⑱『摘錦奇音』・⑳『時調青崑』に収録される。完本系と『摘錦奇音』

は、【破齋陣】とその後の【古風】（『摘錦奇音』では表記なし）で始まるが、『摘錦奇音』以外の散齣集テキストにはこの部分はなく、その次の【風雲會四朝元】から始まっている。

例9「臨粧感嘆」【風雲會四朝元】第二支【前腔】末句、旦の唱

完〔陸〕**凄〃冷〃怎生辜負。**（「リ」「ヒ」は踊り字）

完〔汲〕**凄凄冷冷怎生辜負。**

完〔風〕**這凄ヒ冷ヒ怎生辜負。**〔新增〕香腮謾托憶兒夫、他豈望雲路。

不羨綠袍榮、只愛斑衣舞。爲朝廷、ヒヒヒ（爲朝廷）文場選士。

2〔摘〕**凄〃冷〃怎生辜負。**〔又〕秋來天氣最淒涼。俊秀紛々塵戰忙。

屈指算來經半載、多才想應決文場。

2〔詞〕**這凄〃冷〃怎生辜負。**秋來天氣最淒涼。俊秀紛々塵戰忙。

屈指算來經半載、多才想應決文場。

2〔八〕**凄ヒ冷ヒ怎生辜負。**兒夫分別去求名、未知何日衣錦榮。

想應長安今已到、策試英雄入文場。

2〔時〕**凄〃冷〃怎生辜負。**〔清江引〕秋來天氣最淒涼。俊秀紛々塵戰場。屈指算來有半載、才郎想已姓名揚。

（譯：『詞林一枝』：訴える人も無し。このわびしきさまを何故背かれたのか。「せりふ」秋の氣候のもつともわびしきときに、秀才たちは決戦に忙しい。指折り数えれば半年、多くの才子が試験場に臨んでいることだろう。）

例9も、弋陽腔系テキストが、増補している部分であるが、『風月錦囊』と弋陽腔系テキストでは、七言四句の文句が異なっている。

この「臨粧感嘆」は、當時頻繁に上演され、それゆえに様々なバリエーションも生まれたということであろう。

## おわりに

以上のように、弋陽腔系テキストに収録される『琵琶記』を取り上げ、各テキストについて、系統分けとその性格の分析を試みた。弋陽腔系テキストの大きな流れとしては、『琵琶記』の原テキストにあたるもの（實演テキストまたはなんらかの版本）が元になって、まず弋陽腔系テキストの1群が編集される弋陽腔の實演における脚本にも変化が生じ、徐々に改編が加えられていくなかで、⑩『詞林一枝』、そして⑪『堯天樂』から⑫『時調青崑』へ向かう系統や、滾調を積極的に収録する⑬『玉谷新簧』、⑭『摘錦奇音』へと枝分かれしていった。弋陽腔系テキストは、一つのグループを形成しているといえるが、その内部ではやはり複雑な影響関係を持っているのである。

しかしながら、弋陽腔系テキストが出版物であり、読み物であったということは、テキストの變化が、實演との関わりだけでなく、出版物そのものの變化、書坊間の競争によって引き起こされていることも考慮すべきであろう。つまり、テキストの變化は、必ずしもすべて實演と関係があるとはいい切れず、むしろ、書坊がおもしろさを追求した結果とも言える。このことは、戯曲テキストばかりではなく、當時の小説などの出版物の状況とも軌を一にする。戯曲テキストは實演が元になっているとはいえ、ひとたび出版物として生まれ変われば、出版物としての變化を遂げていくものである。このような視点は、田仲博士の分化モデルを補足することになると考える。

本稿では、『琵琶記』を中心に、弋陽腔テキストの分析を行ったが、他の演目の場合や、今回扱えなかったテキストについて、未解決の部分も残している。今後の課題としたい。

\* 明・徐渭『南詞叙錄』に載せる次の記述による。原文：「時有以『琵琶記』進呈者。高皇笑曰、五經、四書、布錦、菽粟也、家家皆有。高明



『琵琶記』、如山珍味海錯、貴富家不可也。」

\*2 注1前掲書。原文：「趙貞女蔡二郎 即舊伯喈棄親背婦、爲暴雷震死。里俗妄作也。實爲戲文之首。」

\*3 『中國大百科全書 戲曲・曲芸』（中國大百科全書出版社 一九八三）「高明」項。

\*4 例えば、明・張岱『陶庵夢憶』卷六には、目蓮劇を三日三晩通して上演したことが記されている。原文：「余蘊叔演武場一大臺、選徽州旌陽戲子、剽輕精悍、能相撲跌打者三四十人、搬演目蓮、凡三日三夜。」

\*5 田仲一成「十五・六世紀を中心とする江南地方劇の變質について（五）」（『東京大學東洋文化研究所紀要』第七十二冊、一九七七）、同『中國祭祀演劇研究』第二篇 祭祀演劇の展開」第三章 祭祀演劇における戲曲脚本の階層分化」（東京大學出版會、一九八一、三九七頁以下）、同『浙東調腔古戲『琵琶記』について』（『東方學會創立五十周年記念 東方學論集』一九九七）。田仲論文では『琵琶記』の版本を、Ⅰ群：古本系（陸貽典本、巾箱本、凌刻本、『風月錦囊』など）、Ⅱ群：閩本系（余會泉刊『三訂琵琶記』など）、Ⅲ群：京本系（李卓吾評本、汲古閣本など）、Ⅳ群：徽本系（『詞林一枝』、『八能奏錦』、『樂府菁華』、『玉谷新簧』、『摘錦奇音』、『大明春』）、Ⅴ群：弋陽腔系（『樂府紅珊』、『堯天樂』、『徽州雅調』、『時調青崑』など）に分類しておられる（明末刊、槃邁碩人校定『詞壇清玩琵琶記』の眉欄校語に見える各テキストの地域的特徴を示す注記によって分類）。この流傳と分化モデルによれば、まず「社祭演劇脚本」Ⅰ群：古本系が成立し、これが「城居地主型の家演演劇に改編する過渡的な段階」を示すⅡ群：閩本系へ繼承される。そしてⅡ群をもとにして、南京に流布したと思われるⅢ群：京本系、「市場地演劇用」の脚本本と思われるⅣ群：徽本系などへと階層分化が生じ、Ⅴ群をさらに通俗化したⅥ群：弋陽腔系へと展開していくと結論づけておられる。

\*6 黃仕忠『『琵琶記』研究』（廣東高等教育出版社、一九九六）。

\*7 金英淑『『琵琶記』版本流變研究』（中華書局、二〇〇三）。

\*8 注5田仲前掲論文、及び注6前掲書黃文實（黃仕忠氏の筆名）「元譜」與『琵琶記』的關係」（初出『文學遺產』一九八五年第二期、のち『琵琶記』研究に收録）、同『琵琶記』版本小考」（『文學遺產』一九八七年第一期）は、2系統に分類する。『風月錦囊箋校』（中華書局、二〇〇〇、一八七頁）は、『風月錦囊』や廣東出土『蔡伯喈』を簡略本として第3の系統としている。

\*9 弋陽腔系テキストの書誌については、『善本戲曲叢刊』、『海外孤本晚明散齋集三種』それぞれの解説、及び拙論『弋陽腔系散齋集の書誌について』（『汲古』第四十六号、二〇〇四）を参照。

\*10 傳田章『明刊元雜劇西廂記目錄』（東京大學東洋文化研究所附屬東洋學文獻センター、一九七〇）五八頁。

\*11 『海外孤本晚明散齋集三種』李平の序言による。

\*12 注11前掲書参照。

\*13 杜信孚『明代版刻綜錄』には『大明春』の出版元として、卷三に金魁、卷四に唐金魁を擧げるが、『大明春』の卷首には「書林拱唐金魁繡」、また封面には「書林金拱塘梓」とあり、拱唐は字か號であるから、金魁とするのが妥當であろう。

\*14 傳芸子「東京觀書記」（『白川集』文求堂書店、一九四三）。

\*15 『全漢志傳』の書誌については、小松謙「兩漢をめぐる講史小説の系統について」（『中國歷史小説研究』（汲古書院、二〇〇一）第二章『全漢志傳』『兩漢開國中興傳誌』の西漢部分と『西漢演義』」参照。

\*16 注13杜信孚前掲書、卷七による。

\*17 『徽州雅調』と『堯天樂』は日中戦争後中國書店から『秋夜月』という書名で同時に復刻された。趙景深氏は、両者が萬曆以前の作品だ

けを収録し、萬曆間の劇作家——湯顯祖（海鹽腔）や“吳江派（沈璟とその門下）”の作品を含んでいないとして刊行年代を萬曆初期とする（趙景深「秋夜月」（『元明南戲攷略』人民文學出版社 一九五八）が、賛同しがたい。海鹽腔や吳江派は、弋陽腔系とは系統を異にするからである。

\*18 王重民『中國善本書提要』に、首卷二十二から二十三葉の中層の歌の中に「泰昌一月崩了駕、天啓七載不遇金、崇禎高低登龍位、一旦江山屬清朝。」というくだりがあることを指摘している。

\*19 『元本蔡伯喈琵琶記』古本戲曲叢刊初集所收。

\*20 例えば注6黄仕忠前掲書一七一頁、「新刊元本蔡伯喈琵琶記」考。

\*21 注7金英淑前掲書三三〇三四頁には、汲古閣本第二十一齣【雁過沙】（陸貽典本系統では第二十齣）について、陸貽典本・汲古閣本・巾箱本・凌刻本と比較し、その結果、陸貽典本と汲古閣本とが一致し、巾箱本と凌刻本とが一致しているところから、「陸貽典本は明らかに時本（本稿でいう汲古閣本系統）の影響を受けている。しかし陸貽典本は後世の改変を受けているとはいえず、その改変の程度は大きくない」と述べておられる。結論については異論はないが、巾箱本のこの部分は補缺された部分（巻上四十九葉）であり、比較を行うには適当な箇所ではない。

\*22 凌氏の書坊については、表野和江「明末吳興凌氏刻書活動考」（『日本中國學會報』第五十集、一九九八）に詳しい。

\*23 眉批が指摘する部分は、汲古閣本『琵琶記』を例に挙げると次のようである。

【犯尾序】「旦」無限別離情。兩月夫妻一旦孤另。官人。你此去經年望迢迢玉京思省。「生」娘子。莫不是慮着山遙水遠麼。「旦」奴不慮山遙水遠、「生」莫不是慮着衾寒枕冷麼。「旦」奴不慮衾寒枕冷、奴只慮公婆沒主一旦冷清。

\*24 上田望「明代における三國故事の通俗文藝について」（『東方學』

第八十四輯）の註に引かれる彭飛・朱建明論文による。

\*25 葉德均「明代南戲五大腔調及其支流」（『戲曲小說叢考』上冊、中華書局、一九七九）、小松謙「中國古典演劇研究」（汲古書院、二〇〇二）、張庚・郭漢城主編『中國戲曲通史』中卷（中國戲劇出版社、二〇〇六重印）参照。

\*26 注25小松前掲書参照。

\*27 『玉樹英』系とすべきところではあるが、『玉樹英』は殘本であり、『琵琶記』以外のものを校勘する時の便を考えて、『樂府菁華』をもって代表させる。

\*28 汲古閣六十種曲『琵琶記』第三十七齣「書館悲逢」【夜游湖】の後白では、「宋弘是光武時人、光武試把姐姐湖陽公主嫁他、宋弘不從、對道貧賤之交不可忘、糟糠之妻不下堂。黄允是桓帝時人、司徒袁隗要把侄女嫁他、他就休了前妻、娶了袁氏。」（陸貽典鈔本『元本蔡伯喈琵琶記』の該當部分もほぼ同文）とあり、これは『後漢書』の記述と内容的に一致している。しかし、『醒世恒言』卷十九「白玉娘忍苦成夫」の冒頭に「如宋弘不棄糟糠、羅敷不從使君、……又如王允欲娶高門、……」とあり、王允と黄允が混同されていることがわかる。

\*29 注11前掲書参照。



『樂府菁華』 插繪

新鐫梨園摘錦樂府菁華卷之一

才子志冲天勒馬長安期掛綠

佳人愁滿地牽衣南浦怯啼紅

○三元捷報 四德記

望遠行 昨夜燈花結錦

今朝喜鵲聲喧有伺喜事

與奴傳想是兒夫奪錦標

存錦標愁悶鎖眉頭

上風光好爭奈進子不得

早登春錢旅歸身不月

照久得登春錢旅歸身不月

草香香香香香香香香香

道曉雨枝頭紅香小江石欄

伯喈長亭分別

書林 劉君錫 輕

王會雲 梓

○夫人無害虎心虎有傷

氣洶洶熱氣洶洶自前日被

老病都是我我因因而成

將來的令人越想越恨

北端正好 情性乖

他為把威風仗好教人

○首

羅江怨歌

追求無更有事不關心者亂以為

伏侍老爺不想老爺收了前日曉行

時怕他有孕再三分付我不要難為他

生一个老爺定有偏心因因送老爺起

『樂府菁華』

時尚漸腔 新刊徽板合像滾調樂府宮腔摘錦奇音卷之一

羅江怨歌

伯喈高堂慶壽

瑞鶴仙

十載親燈火論高才絕學休誇班馬風雲太平日正

驀驀欲騎魚龍將化沉吟一和怎離却雙親膝下且盡心井

肯功名富貴付之天也

九萬程○經世手清時美玉堂金馬豈難登要將榮祿歡

酒且戴儒冠昨日分今喜安排酒筵未對春光就花下酌

否酒雙親慶壽昨日分今喜安排酒筵未對春光就花下酌

春又末年、依舊最喜今朝春酒熟滿目花開如繡

做款 襲正我 還輯

敦睦堂 張子懷 續梓

『摘錦奇音』

新刻京板青陽時調詞林一枝卷之一

古臨 玄明黃文華 編輯

瀛賓却綉甫 全纂

閩建書林葉志元綉梓

○杜氏勘問小桃

晉賢歌

心中有事悶悠悠上幾度躊躇

未肯休說起真个羞思量真個憂端的

追求無更有事不關心者亂以為

伏侍老爺不想老爺收了前日曉行

時怕他有孕再三分付我不要難為他

生一个老爺定有偏心因因送老爺起

○首

羅江怨歌

追求無更有事不關心者亂以為

伏侍老爺不想老爺收了前日曉行

時怕他有孕再三分付我不要難為他

生一个老爺定有偏心因因送老爺起

『詞林一枝』

弋陽腔系テキストにおける『琵琶記』の収録篇目一覧

No.	篇目	汲本	①樂府菁華	②玉谷新簧	③摘錦奇音	④詞林一枝	⑤八能奏錦	⑥大明春	⑦徽池雅調	⑧堯天樂	⑨時調青崑	⑩玉樹英
22	侍奉湯藥	23										
21	荷亭滌悶	22		△②								
20	贈閨飢荒	11							⑦			
19	五娘請糧	17						⑥(滾)				
18	太公掃墓	38					⑤					
17	聽女迎親	33				⑤						
16	辭親赴選	5			③(滾)							
15	書館題詩	36				④(滾)	⑤					
14	途中自嘆	32			③滾		⑤			⑧		
13	臨粧感嘆	9			③滾	④(滾)	⑤				⑨	
12	高堂慶壽	2			③		⑤					
11	牛府成親	19		②滾	③滾							
10	書館托夢	なし		②					≠⑦			⑩
9	書館相逢	37	①		③						⑨(滾)	⑩
8	拒父問答	31										⑩滾
7	詰問幽情	30				④(滾)						⑩滾
6	描畫眞容	29		△②	(△)	④		⑥(滾)		⑧(滾)	⑨(滾)	⑩
5	中秋賞月	28	①		③滾	④				⑧(滾)	⑨(滾)	⑩
4	剪髮送終	25	①									⑩
3	書館思親	24		②滾				⑥(滾)			⑨	⑩
2	上表辭官	16	①	②滾	③			⑥				⑩
1	長亭分別	5	①	②滾	③滾		⑤	⑥(滾)			⑨	⑩

注：収録されているものを、テキストの通し番號で示す。番號の後の「滾」や「(滾)」は、滾調または滾調と思われる曲辭が含まれることを示す。  
△はやや一致することを示す。(番号)は、原缺だが、目録によって収録されていることが確認できるものである。